

イザヤ書14章「バビロンに対する重荷②」

1A 主による軍隊 13

1B 主の日 1-16

1C 諸国の軍隊 1-5

2C 全能者からの破壊 6-16

1D 産みの苦しみ 6-8

2D 世界の悪への罰 9-12

3D 逃げおおせない民 13-16

2B メディア人 17-22

1C バビロンの崩壊 17-18

2C 永久の廃墟 19-22

2A 永久の荒廃 14

1B ヤコブの憩い 1-2

2B 嘲りの歌 3-23

1C 虐げる者の果て 3-8

2C 下界の陰府 9-11

3C 明けの明星 12-15

4C 投げ出される屍 16-23

3B 打たれるアッシリア 24-32

1C 主のご計画 24-27

2C ペリシテの死 28-32

本文

イザヤ書 14 章を開いてください。今晚は、前回の学びの続きで、バビロンに対する神の裁きの後半部分をみていきます。13 章と 14 章が、バビロンに対する裁きが書かれており、前回は 13 章を見てきました。

背景は、バビロンが、メディア・ペルシアの連合軍によって、一夜にして滅んだことです。紀元前 539 年のことです。バビロンは、イスラエルが神に背いてきた裁きの器として用いられました。主が、イスラエルに、背いたら外国に捕え移されることになる、モーセが警告していたのですが、それが果たしてその通りになりました。エルサレムの神殿が破壊されたのが、紀元前 586 年です。けれども、そのバビロンが高ぶり、最後の王ベルシャツアルが宴会をしている時に、最後の日が告げられて、彼は殺されます。

しかし、バビロンの崩壊についての預言は、その出来事だけを背景にしているのではありません。世が始まり間もなくしてから台頭したバビロンがあります。ニムロデという、神に反抗する権力者が建てた町がバベルであり、そこに天にまで届き、自分たちの名をはせるバベルの塔ができました。主は、それを愚かなものにするために、言葉をばらばらにされました。これが、霊的なバビロンの始まりです。黙示録 17-18 章にて、王たちと淫行を働く大淫婦として、このバビロンが登場します。イエス様が再臨される直前に、反キリスト率いる十人の王の軍隊によって滅ぼされます。世と世の欲は過ぎ去るが、主のみこころを行う人々は、生きながらえるのです。

2A 永久の荒廃 14

そして 14 章は、主が戻ってこられた後に、イスラエルが慰めを受け、また自然界も慰めを受けることを預言しています。そして、バビロンの支配者の行く末、その裁かれた姿を映し出しています。

1B ヤコブの憩い 1-2

¹まことに、主はヤコブをあわれみ、再びイスラエルを選んで、彼らを自分たちの土地に憩わせる。寄留者も彼らに連なり、ヤコブの家に加わる。

主は、約束の地から彼らを引き抜いて、離散の民とされました。しかし、主の彼らに対する憐れみは、変わることがありません。「再びイスラエルを選んで」とありますが、一度、選んだけれども見捨てて、それで再び選んだという意味ではありません。ここの再びは「なおのこと続けて」という意味合いです。ちょうど、エジプトで奴隷としてもだえ苦しんでいた彼らを見て、「みこころに留められた」とあります(出エジプト 2:25)。ずっと忘れていて、ようやく思い出したのではなく、彼らへの思いは変わることなく、時が満ちて行動に移されるという意味であります。彼らが離散の地に散らされていて、ご自分の定められた時に彼らを連れ戻して、約束の地に憩わせるということです。

主は、バビロンを滅ぼし、ペルシアの王キュロスによって、ユダヤ人を帰還させます。けれども、ここ 1 節にあるようなことは起こりませんでした。寄留者が彼らに連なり、ヤコブの家につながる、という状況ではありませんでした。エズラ記を見れば、彼らはむしろサマリア人など、他の住民の間に帰還して、彼らから脅しや反対を受けながら、神殿再建を果たしたのです。憩うということとは、異なっていました。そして、ギリシア時代に迫害を受け、ローマ時代の中でも圧迫を受けていました。そして、紀元 70 年に、神殿は再び破壊され、世界離散の民となりました。ですから、これはまだ先の話、終わりの日の幻なのです。

18 世紀の終わりから、世界で迫害を受けているユダヤ人たちが帰還を始めて、前世紀にイスラエルの国が建てられました。そして今に至るまで、世界からの帰還の波は続いています。しかしながら、彼らが憩うということまでは、まだまだ到達していません。周辺の敵による脅かしは未だ続いていて、世界にいるユダヤ人に対する憎悪や危害は、ナチスの時代と同じように続いています。

主イエスが再来することによって、彼らは帰還して、無事に憩うことができるようになります。

そして、その大きな特徴は、「寄留者も彼らに連なり」とあるように、その地に住む人々のほうが、彼らの支配を歓迎するということです。これも、今に至るまで実現しています。このような平和的共存は、主イエスが再臨し、イスラエルも贖われて、実現するものです。

² 諸国の民は彼らを迎え、彼らのところに導き入れる。イスラエルの家は主の土地で、その寄留者を男奴隷、女奴隷として所有し、自分たちを捕らえた者を捕らわれ人にし、自分たちを追い立てた者を支配するようになる。

イスラエルの民に対して、主は、律法の中で「あなたがたが、エジプトで虐げられたのだから、あなたの方の間の寄留者を虐げてはならない。」と言われていました。ですから、彼らが支配しても、虐げるのではなく、彼らを、尊厳をもって受け入れるのです。諸国の民自身が、そのことを願って、イスラエルの民を迎え入れ、導きいれています。これが、万物を支配するようにアダムに命じられた、その統治の理想です。支配を受けることによって、かえって被造物がその自由を味わえるように、イスラエルの民の支配を受けて、寄留者は大きな益を受けます。

そして、イスラエルの民にとって、バビロンに虐げられてきたことの慰めが与えられます。同じように、バビロンによって神の民が苦しんだように、この世の制度の中でキリスト者は苦しみます。しかし、主はそうした悪を行う者たち、苦しめる者たちに報いを与えられることによって慰めを与えるのです。「Ⅱテサ 1:6-7 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。」そして、神の国において、キリストと共に世界を統べ治めるのです。

2B 嘲りの歌 3-23

1C 虐げる者の果て 3-8

³ 主が、あなたの痛み、あなたへの激しい怒りを除き、あなたに負わせた過酷な労役を解いて、あなたを憩わせる日に、⁴ あなたはバビロンの王について、このような嘲りの歌を歌って言う。「虐げる者はどのようにして果てたのか。横暴はどのようにして終わったのか。⁵ 主が悪しき者の杖を、支配者の笏を折られたのだ。⁶ 彼は激怒して諸国の民を討ち、絶え間なく彼らを討ち、怒って国々を容赦なく 虐げて支配したものだだったが。

バビロンの横暴に対して、バビロンの王に対する嘲りの歌を、イスラエルが歌うようになると、神は言われます。これは、「ざまあ見ろ！」というような復讐心による嘲りではありません。激しく人々を虐げてきた、その悪に対して、確かに報いが与えられたことを、余裕をもって眺めている姿です。

悪を行うのに集まったところで、滅ぼされるために反抗しているのに過ぎないからだ、ということですね。私たちは、悪に対してこのような余裕を持つことができます。その悪は必ず、嘲りの対象になるような、惨めな姿で終わるからだということを知っているからです。

⁷ 全地は安らかに憩い、喜びの歌声をあげる。⁸ もみの木もレバノンの杉も、おまえのことを喜ぶ。『おまえが倒れ伏したときから、もう私たちが切り倒す者は上って来ない。』

神の民のみが苦しみを受けたのではなく、自然界、被造物も苦しみを受けてきました。バビロンは、他国に侵略する時に無意味にどんどん森の木々を倒していきました。その横暴さを示すために、暴力的になぎ倒していったのです。そこで神がバビロンを滅ぼされるというのは、こうした被造物の呻きにも応えられたということができます。

使徒パウロが、その点をロマ 8 章で説明しています。「8:21-22 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」すばらしいですね、私たちの主が戻って来られると、私たちが贖われているだけでなく、この被造物も贖われます。被造物が、神のみこころにかなったように回復し、調和した世界になるのだということを教えてくれています。

CS ルイスの書いた「ナルニア王国物語」には、回復したナルニア王国で、木々も、水の中の魚も、喜び踊っている姿が現れます。これは、ここの預言にも表れている姿です。詩篇にも出てくる姿です。「96:11-13 天は喜び地は小躍りし海とそこに満ちているものは鳴りとどろけ。野とそこにあるものはみな喜び躍れ。そのとき森の木々もみな喜び歌う。【主】の御前で。主は必ず来られる。地をさばくために来られる。主は義をもって世界をその真実をもって諸国の民をさばかれる。」主が来られる時、主が正しく裁かれるので、被造物も喜ぶのです。

2C 下界の陰府 9-11

⁹ よみは、下界で おまえが来るのを迎えようとざわめき、死者の霊たち、地のすべての指導者たちを揺り起こし、国々のすべての王を その王座から立ち上がらせる。¹⁰ 彼らはみな、おまえに告げる。『おまえもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になった。』¹¹ おまえの誇り、おまえの琴の音はよみに落とされ、おまえの下には、うじ虫が敷かれ、虫けらがおまえの覆いとなる。

バビロンの王は、自分が倒れて死ぬだけでは終わりません。死んだ後に、陰府に下ります。そこには、先に下っていった横暴な国々の王たちも下っていました。エゼキエル書にも、イスラエルの周囲にある国々の王たちが、死んだ後もそのまま死後に陰府に下っている姿を、ここイザヤが伝えているように生々しく伝えています(31章、32章)。そこに、最後に彼らを従わせていたバビロンの王も下ったのです。

彼らは惨めな姿になっていますが、「おまえもまた、このように弱くなってしまったのだな。」と弱々しくあざ笑っている姿を描いています。そして、そこにはバビロンの栄華や美は何一つ残されていません。ヤコブの家が苦しみの後に安きを得たのとは異なり、彼は休むところがありません。寝床には、うじ虫がおり、虫けらが多くことになります。

イエス様は、うじ虫についてお語りになったことがあります。「マル 9:48 **ゲヘナでは、彼らを食らううじ虫が尽きることがなく、火も消えることはありません。**」ゲヘナというのは、当時は、ヒノムの谷のことを指しています。そこは、老廃物が捨てられ、そこで火による焼却が絶え間なくなされていました。特に、神殿のいけにえの牛や羊、やぎから出てきた老廃物には、うじ虫が湧いています。このことをイエスは、お語りになっていました。聞いていた人には、神のさばきによって、ゲヘナではこのようにされていくのだということを、リアルを持って聞いていたのです。

ヘブル 9 章 27 節には、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」と書いてあります。死んで終わり、ではないのです。バビロンの王が殺されるだけでなく、死んだ後にも、このように報いを受けるのです。

3C 明けの明星 12-15

¹² 明けの明星、暁の子よ。どうしておまえは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしておまえは地に切り倒されたのか。

ここ 12 節から 15 節までは、人としてのバビロンの王に語っていない表現になっています。むしろ、バビロンの王が、あれだけの横暴を働いていた、その背後にある存在に対して語っています。ここが聖書預言を読む時に大切になる部分ですが、初めは人や国に対して語っているようで、途中からその背後で支配している霊的存在に対して語るということがあります。エペソ 6 章には、悪魔の策略に対して立ち向かうために、その格闘が「エペ 6:12 **私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。**」とあります。国や組織の動きの背後に、こうした悪魔による支配があって、横暴なことや、残虐なことを行なうことができます。

イエス様が、この箇所について弟子たちに言及されたことがあります。ご自身の権威を授けて弟子たち七十人を遣わしましたが、戻ってきた彼らが、悪霊がイエス様の御名によって追い出すことができたことを喜んで帰ってきました。そしてイエス様が、「ルカ 10:18 **イエスは彼らに言われた。「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。」**」と言われました。イエス様は、たった今、サタンが天から落ちたかのように話されましたが、はるか昔、サタンが天から落ちたことを話されているのだと思います。サタンは天から、神の御座のある領域から落ちた者です。

彼は、「明けの明星、暁の子」と呼ばれています。13 節には「神の星々」とありますが、これらは天使のことを指しています。夜明け前、最も光輝く金星のような星のことですが、夜が明けようとしていてもなおのこと輝いている、最も光を放っている存在です。つまり、天使の中で最高級の天使長であり、神にとっても近かった存在であったことが分かります。そして私たちの主イエス様ご自身も、「明けの明星」と呼ばれています（黙示 22:16）。イエスは神の本質の完全な現われとしての神の栄光の輝きですが（ヘブル 1:3）、サタンも神の輝きを最も色濃く表していた存在でありました。

そして、「どうしておまえは天から落ちたのか。」と言っています。聖書全体を見ると、段階を踏んでいます。イエス様が弟子たちに言われたように、サタンは今、天から落ちています。天と言っても、神の御座のある天から落ちたのであり、けれども、地上とも天とも接触のある「空中」とも呼ばれているところに存在します。エペソ 2 章では「空中の権威を持つ支配者」として呼ばれています。ヨブ 1 章には、サタンが神の前に出て、なお地上にいるヨブに対して害を加えることが、主の許しの中で行われています。

そして、神が終わりの日に患難を地上に下します。その時に悪魔も空中から地上に落とされます。「黙示 12:9 こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が地に投げ落とされた。また、彼の使いたちも彼とともに投げ落とされた。」そして、地上には獣の国と呼ばれる反キリストの国ができます。悪魔が最後に自分の本性を全開にする時期です。そして、主キリストが地上に戻って来られます。その時に悪魔は、さらに低い所、すなわち「底知れぬ所」に投げ込まれます。「黙示 20:2-3 彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように、底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけ、その上に封印をした。その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる。」そして千年が経って、サタンは火と硫黄の燃える池、ゲヘナに投げ込まれることになります。

ですから、天から空中へ落ち、空中から地上に落ち、それから底知れぬ所に落ち、そしてゲヘナ、地獄に落ちます。こうして、自分を高めた者は最も低められたということが出来ます。まさに、イエス様が言われたように、自分を高める者は低くされるのです。

¹³ おまえは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。¹⁴ 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』

明けの明星の問題は何だったのでしょうか？一つに、「私は」という主語が問題であることが分かります。これが高ぶりの根っこです、神、キリストではなく「私」であります。その反対に、へりくだりとは「私」ではなく、「キリスト」です。

「北の果てにある会合」とありますが、預言者エゼキエルがバビロンにいた時に、同じように北からケルビムがやって来たことが書かれており、北の方角に主の御座からの栄光が降りる何かがあるようです。そして「密雲」は、神の栄光を示しています。この方よりも優れたところいよという欲望、これがサタンを落とす原因となりました。

¹⁵ だが、おまえはよみに落とされ、穴の底に落とされる。

先ほど見たように、地に落とされるだけでなく、地の下にまで、底知れぬ穴に鎖でつながれます。そして、鎖が解き放たれた後に、火の池、ゲヘナに投げ込まれます。サタンは、この高ぶりの後の墮落に、人々を引きずり込もうとしているのです。

4C 投げ出される屍 16-23

こうして、霊の世界を見せた後に、地上の場面に預言を移します。バビロンの王が殺された後の、屍について話します。

¹⁶ おまえを見る者は、おまえを見つめ、おまえについて思いを巡らす。『この者が、地を震えさせ、王国を震え上がらせ、¹⁷ 世界を荒野のようにし、町々を壊し、捕虜たちを家に帰さなかった者なのか。』¹⁸ 諸国のすべての王たちはみな、それぞれ自分の墓で、尊ばれて眠っている。¹⁹ しかしおまえは、忌み嫌われる枝のように、墓の外に投げ捨てられる。剣で刺し殺された者たちで、おまえはおおわれ、屍のように、墓穴に下る者たちに踏みつけられる。²⁰ おまえは墓の中で彼らとともにすることはない。自分の地を滅ぼし、自分の民を虐殺したからだ。悪を行う者どもの子孫は 永久に、その名を呼ばれることはない。²¹ 彼の子らのために屠り場を備えよ。先祖の咎のためだ。彼らが立って地を占領し、世界の面を町々で満たさないように。」

当時、人の尊厳はその人が生きている間だけでなく、その後どのように葬られるかというところまで及んでいました。古代の遺跡を見れば、それが良く分かります。列王記や歴代誌には、一連のユダの王が民に敬われていたのかそうでなかったのかを示す物差しとして、どこに葬られているかの記述があります。バビロンの王が、「忌み嫌われる枝のように、墓の外に投げ捨てられる。」とあります。これだけ人々から忌み嫌われていたのです。興味深いことに、「枝」という言葉は、キリストご自身にも使われていました。エッセイの根株から新芽が出て若枝が伸びますが、そのようにキリストは小さきところから出て、そして世界を治められる王となります。しかしバビロンは忌み嫌われ、墓の外に投げ刺されます。

そして、この王国が再び立たないために、彼の名が覚えられないよう、その子孫も受け継ぐことのないための処置を取ります。黙示録 18 章において、終わりの日のバビロンも永遠に立ち直ることのないように、御使いが大きなひき臼のような石を、海に投げ込んでいます。

²²「わたしは彼らに向かって立ち上がる。——万軍の主のことば—— わたしはバビロンから、その名も、残った者も、子孫も末裔も絶ち滅ぼす。——主のことば—— ²³ わたしはこれを針ねずみの領地、水のある沢とし、滅びのほうきで一扫する。——万軍の主のことば。」

これが永遠の滅びです。後に残るものを残させない。そして、そこには虚無のみを置く、ということです。千年王国において、すべてはエデンの園のようになりますが、バビロンの地だけは廃墟のまま、時が止まったように閉じ込められます。

3B 打たれるアッシリア 24-32

こうして、バビロンに対する宣告をイザヤは終えます。ここで一気に、目の前に迫っているアッシリアに対する宣告に移ります。終わりの日に起こることを伝え、それから同じように、神が、アッシリアに対しても行なってくれることを伝えています。遠い未来について約束しても、近い未来において同じ神がおられることを信じるのが大切です。

1C 主のご計画 24-27

²⁴ 万軍の主は誓って言われた。「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの図ったとおりに成就する。²⁵ わたしはアッシリアをわたしの地で打ち破り、わたしの山で踏みつける。アッシリアのくびきは彼らの上から除かれ、その重荷は彼らの肩から除かれる。」

主が遠い未来にバビロンに行われること、そして終わりの日に行われること、それをアッシリアにも行なってくださいます。アッシリアのくびきを除いてくださいます。そして、重荷をユダの民の肩から除いてくださいます。

そして主がここで強調されているのは、「わたしの地で打ち破り、わたしの山で踏みつける。」ということです。アッシリアは、ユダは自分のものだとしました。そしてエルサレム、そのシオンの山は自分のものだとしました。けれども、主は「これはわたしのもの」と宣言されています。主がご自分のものだと言っているものを、自分が貪るという過ちを犯します。

²⁶これが、全地に対して立てられた計画。これが、万国に対して伸ばされた御手。²⁷ 万軍の主が計画されたことを、だれがくつがえせるだろうか。御手が伸ばされている。だれがそれを押し戻せるだろうか。

そして、このアッシリアを倒す神のご計画が、全地に対して、万国に対して行なわれることだと言われます。つまり、世界中で覚えられるべき出来事にして、主こそが神であることを知らしめるものにする、ということです。かつて、エジプトから脱出する時に、主はそれを、諸国への証しとされました。ですので、後世に、ラハブの証言でも、エリコの者たちはおびえていました。サムエル記第

一で、イスラエルに対峙したペリシテ人が、彼らが神の箱を持ってきた時に、怖気付きました。ヒゼキヤの時に、エルサレムがアッシリアから救われたことによって、多くの国が贈り物を持ってきたことが、歴代誌第二に書いてあります(32:23)。

そしてもう一つ強調していることは、「計画」であります。誰も、主の計画をくつがえせません。ですから、立てられた計画に反対することほど、愚かなことはありません。相手を潰そうとしても、潰されるのは自分のほうです。同じことを知っていたパウロは、ロマ 8 章で、私たちがどんな苦しみあっても、キリストにある神の愛があるから、圧倒的な勝利者であることを話しました。

2C ペリシテの死 28-32

次は、ペリシテに対する主の宣告です。

²⁸ アハズ王が死んだ年、この宣告があった。²⁹「喜ぶな、ペリシテの全土よ。おまえを打った杖が折られたからといって。蛇の根からまむしがでて、その実は、飛び回る燃える蛇となるのだから。

7 章以降で、イザヤが預言していたアハズ王が死にました。時は紀元前 715 年のことです。アハズが死んだことを、「おまえを打った杖が折られたから」と言っています。ペリシテ人は、士師の時代にはサムソンとの戦いにあるように、イスラエルに対して優勢でした。サウルがペリシテ人と戦うことは多かったです。けれどもダビデを神は立てられ、そしてダビデ王国が確立されると、ペリシテ人は決定的な敗北を経験します。それ以降、二度とユダの国には齒向かえない、従属するしかないという状況でありました。けれども、アハズは主に背く王でした。他の周囲の民もそうでしたが、ペリシテもユダのシェフェラ地方のある町々に突入したり、その弱体化したところを突いていきました(2歴代 28:18)。

ですから、アハズが死んだことによって、ダビデ王朝がさらに弱まったとペリシテ人は思い、喜びました。けれども、主はアハズによってユダの国を見捨てられていません。主はアハズの過ちにも関わらず、インマヌエルの約束を与え、彼らがアッシリアの手に陥らない約束を与えておられました。ダビデの子孫がペリシテに対して「燃える蛇」となって、ペリシテを倒してしまいます。ちょうどそれは、アロンの杖をファラオの前に出すと、蛇になった奇跡を思い出させるものです。この燃える蛇とは、アハズの子ヒゼキヤです。ユダの国はアッシリアから守られます。そして、究極的にはそこはイスラエルの支配する地となります(11:14)。

彼らの過ちは、「ユダが弱くされることを喜んでいいる」ということです。人が倒れること、しかも主の民が弱くされることを喜んでいます。主は、このような見下しを喜ばれません。

³⁰ 弱い者たちの長子は養われ、貧しい者は安らかに伏す。しかし、わたしはおまえの根を飢えて

死なせる。おまえの残りの者は殺される。³¹ 門よ、泣き叫べ。町よ、叫べ。ペリシテの全土は震えおののけ。北から煙が上がり、その編隊から落伍する者がいないからだ。

アハズはアッシリアに拠り頼んでいました。対してペリシテは、絶えずアッシリアを刺激するような反抗的な態度を取っていました。紀元前 701 年には、センナケリブに対抗して彼の手の中に落ちます。アッシリアがエルサレムを包囲しに、701 年に南進しますが、その前にペリシテが反抗した彼らを襲った姿です。興味深いことに、アッシリアは、弱い者たち、貧しい者には手を出しませんでした。ここに、主のご計画があります。

³² 異邦の使者たちにどう答えるべきか。『主がシオンの礎を据えられたのだ。主の民の苦しむ者たちは、ここに身を避ける。』』

ここは、ペリシテ人が、ヒゼキヤが王の時に、反アッシリア同盟を打診するために来たのでしょうか。その時に預言者イザヤは、その使者にこの言葉を伝えたのです。シオンに礎があると。ペリシテ人は他の遠い国々比べたら、エルサレムにはとても近いところに住んでいます。彼らはここにこそ、主がおられて、この方が救い主であることを知ろうと思えば知ることができました。しかし、それを認めなかった。シオンにこそ、主が礎を置いておられるのです。

そして、「主の民の苦しむ者」と言っています。悩んでいるけれども、主にこそ希望があるとする者たちです。私たちの救いは、シオンにおられる主にあります。エルサレムで十字架につけられたイエスです。「1ペテロ 2:4-6 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。』」